

# ガンディーによる村落工業の復興

— ことに抄紙技術の「改良」とハリジャンの投入をめぐる —

小西正捷

はじめに

マハートマー（偉大なる魂）と呼ばれたインド独立の父モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーにかかわる問題は、本質的にインド近現代史の問題であつて、筆者にとつてはまったく専門外のことである。しかし一方で、以下にとりあげる問題は、筆者が過去二〇年余にわたつて断続的に行なつてきた南アジアの抄紙技術伝統に関する研究の延長線上にあることも事実である。

本稿をいまこのようになかたちで発表する直接的なきっかけとなつたのは、一九九七年一〇月六日に大阪で開催された、第一〇回南アジア学会大会でのシンポジウムであつた。この年はインド独立五〇周年にあたる年であつたが、それを期に同大会では「ガンディー再考」と題するシンポジウムを開催し、筆者はそこで、ガンディーのスワデーシー運

動における村落工業復興策に位置づけられる、抄紙活動に関する予備的考察の一端を述べる機会を得た。本小稿は同シンポジウムにおける発表要旨に加筆したものであるが、タイトルにもかかわらず、なお主題をいまだ具体的に展開するに至っていないことを遺憾とする。しかしこの問題が、筆者にとつての今後の課題であることは当然ながら、インド近現代史や経済学等を専門とする研究者の側からも、これまでとやや異なるこのような視点からの研究が進められ、具体的な教示を得ることができればとの期待もあつて、あえてこのようない文を発表することにしたのである。

さて筆者は、これまで紙本以前の書写素材をインダス文明期以来追う一方で、紙自体が南アジアにもたらされたのがベンガル地方とグジャラート地方ではつとに一二〜一三世紀ころであつたにもかかわらず、抄紙技術の伝統が実際に伝えられたのは一五世紀以降まで降り、かつそれが貴族

や商人を中心とした上流社会に普及したのはさらに遅く、ムガル朝期を待たねばならなかったことを明らかにした [Konishi 1984; 小西 一九八五、一九九六ほか]。すなわちインドにおける製紙技術の展開はイスラーム化という歴史的過程と大きくかかわっているが、そのためヒンドゥー伝統に保守的な南インドの一部やオリッサ地方などでは、ボロ布を原料として動物質の膠を滲み止めとするこの技術伝統がムスリムによって伝えられたこと、すなわちその儀礼的「不浄」性を理由に、一八世紀にいたるまで、紙本以前の主たる書写素材であった貝葉はいようを用いていたのである。すなわちここにはすでに社会問題としてのコミュニケーションな要素があったが、それとともに、ことにその素材と方法に関して、のちにガンディー主導のもとに設立された KVIC (Khadi Village Industries Commission) が「ハリジャン」(いわゆる旧「不可触民」)を村落工業レベルでの製紙業や皮革製品・石鹼等の製造に導入したことも関係しているかもしれないことには、注意が引かれる。それは単なる偶然であったのだろうか。

## ガンディー以前

ムガル朝期の抄紙センターと当時の交易ルート [図1]

史苑 (第五九巻一号)

をここに再録しておくが、これはほぼ三〇〇年にわたるその消長を無視して当時のすべての製紙センターを図上にプロットしたものであり、実際には、一九世紀に入ってからムガル朝末期において、伝統的製紙業の凋落は著しかった。すなわち、ムスリムによる抄紙技術が普及しだした一六世紀ころからすでにヨーロッパからは機械漉きの紙が流入しはじめ、ことに産業革命以降は圧倒的な量の工場製紙 (mill-made paper) が輸入されていたからである。一九世紀末から今世紀初頭における工場製紙の輸入総額をあらわす「表1」は、そのような状況の一端を示すであろう。とりわけカーゾン卿のもとでの「ベンガル分割」が行なわれた一九〇五年以降に工場製紙の輸入総額が極端に増加していることが目立つが、当然ながらその大半は宗主国イギリスからの輸入であり、ここでもランカシャーの綿布と同様に、インドがイギリスにとつての、イギリス産製品を売りさばく重要な植民地市場であったことをよく物語っている。しかし、このころになるとイギリス本国自体でも紙が底だし、インドにその原料が求められるようになった。製品よりも第一次産品を植民地に求める例の方式である。従来原料はボロ布・亜麻布等であったが、かくてクシヤ草やタヌキマメ科のサン・ヘンプ、またバナナ等のセルロースに富むインド特産の草本にも植物性繊維が求められ、徹

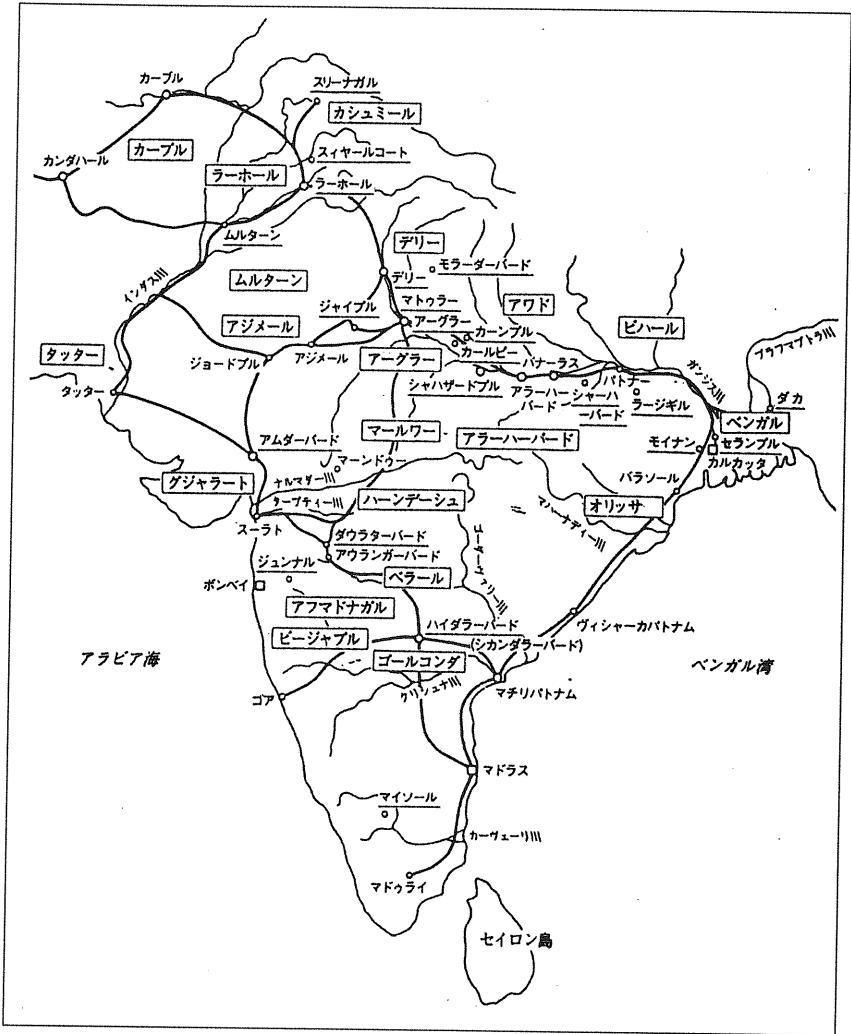


図1. ムガル朝期の主要交易路と当時の製紙センター

□ はアウラングゼーブ帝 (在位 1658 ~ 1707 年) 時代の州名。  
 下線の地名はムガル朝期の製紙センター。  
 ○ は当時の都市, □ は現代都市。

(小西作図 1996)

表 1. インドにおける紙の総輸入額

史苑  
(第五九卷一号)

1880 - 81	Rs.	5,648,066	
1881 - 82		5,389,888	
1882 - 83		4,450,854	
1884 - 85		4,892,121	
1885 - 86		4,338,000	
1886 - 87		3,926,215	
1887 - 88		5,263,063	
1888 - 89		4,889,923	
1900 - 01		4,529,996	
1901 - 02		5,271,634	
1902 - 03		5,248,058	
1903 - 04		5,218,396	
1904 - 05		6,437,288	
1905 - 06		7,048,978	{ 印刷用紙            2,833,632 書簡箋・封筒    2,266,714 その他の紙        2,575,366 厚紙・ボード      335,393
1906 - 07		8,011,105	

[after Liotard, 1833 : 1 ; Watt, 1892 : 312 ; do, 1908 : 867]

表 2. 1900 ~ 1907 年におけるインド産紙の輸出総額

1900 - 01	Rs.	78,277	
1901 - 02		53,658	
1902 - 03		42,903	
1903 - 04		26,781	
1904 - 05		28,350	
1905 - 06		13,703	{ 印刷用紙            5,883 書簡箋・封筒    167 その他の紙        507 厚紙・ボード      50
1906 - 07		6,607	

[after Watt, 1908 : 867]

底的な有用生産物調査に基づくさまざまな調査と実験が次々と試みられた。その結果は、地域別にまとめられた一九〇八年を中心とする多くのモノグラフや、またG・ワットらによるインドの有用産品に関する報告書・手引書にも見られるところであるが「Watt 1892; 1908など」、これらの植民地政策の産物が、のちにはガンディー主導のKVICによる、ワルダールやプネーにおける抄紙新技法の実験や開発にも大いに活かされていることも見過ごせない。

さらに今世紀初頭になると、やがて紙の使用量がさらに格段に増した英領インド自体においても、植民地政府によって紙の工場生産が試みられるようになり、その一部はインド国内での使用のみならず、宗主国向けにも輸出された「表2」。その嚆矢がベンガルのセランプル製紙工場であるが、それもすでに一八六〇年代には操業をやめてしまっており、産業考古学の対象ともなる遺跡となってしまうている。いずれにせよ先にも触れた例の一九〇五年のベンガル分割時には、インドにおける製紙業はまさに末期的状况であった。「表2」においても、紙の輸出総額が、輸入総額とは対照的に、急激に落ちこんでいるのが見てとれるであろう。

しかもこのような状況にあつて、概して毎分六〇メートルもの紙が漉ける一種の長網マシンと、煮沸機(ボイラー)・洗浄機(ウォッシュャー)・綿打ち機(ワイロウ)・塵払い機

(ダスター)・裁断機(カッター)などをすべて備えた工場製の機械漉き紙に対し、原料としての紙料の準備だけで水漬け法(Cold-retting)なら一ヵ月以上もかかり、一枚一枚小さな玉で数百回も磨きあげる伝統的手漉き紙がかなうものでは到底なかった。この伝統的抄紙技法についてはまたのちにもとりあげるが、とりあえずは後掲「図2」の各左列を参照されたい。

伝統的抄紙技術にとつては、さらにもう一つの脅威がこの時代にはあつた。すなわち英印政府は、刑務所の受刑者による抄紙も試みはじめたのである。このいわゆる「監獄紙」(Jail-paper)は、主として故紙を用いたやや簡便なものではあつたが、これも一種の手漉き紙であつただけに、伝統的紙漉き職人たちにとつてのもう一つの大きな圧迫となつた。「監獄紙」はすでに一八七〇年ころから生産されはじめ、世紀末までにはインドのほぼ全土に広がつていた。そのおよそ二世紀前、ムガル朝第四代皇帝のジャハーンギール(一五六九〜一六二七)のころには総計九〇万ルピーにも相当する良質な紙を多量に生産していたパンジャブのスイヤールコートにあつては、一九世紀末ともなると紙漉き職人はわずかに三七〇人を数えるのみとなつてしまひ、しかもその半数近くを占める一五〇人ほどが、刑務所の受刑者であつたという【Konishi 1990】。

当然彼らは永年にわたる勸を要する伝統的職人ではなかったから、未熟練者にも通用する簡便な技法への「改良」や、故紙を含むあらたな原料の導入が試みられた<sup>2)</sup>。この点はやはり、のちのガンディーらの製紙技術にも一部活かされているが、刑務所では人件費や利潤などはまったく考慮される必要がなく、紙はすべて政府の買い上げとなっていた点が、政府の援助を受けているとはいえ一般的市場経済の範疇にあつて競争原理に基づく、KVICの場合とは大きく異なっている。

伝統的紙漉き職人たちをめぐるこのような状況は、何百年にもわたつて旧態依然たる技法に固執し、社会の殻に閉じこもりつづけてきた彼らにとつて、致命的なものであつたことが伺われる。しかも彼らに対しては、かつてのムガル朝期のような王侯貴族からの庇護はおろか、公的機関からの何らの指導も援助もないままに、時流にまかせてまったく放置され、無視されてきたのである。そのような状況は、一九〇八年ころを中心としたインド各地での製紙業に関する一連のモノグラフからも見てとれるが、さらに一九三〇年代のダウド・ハンターによる実地調査[Hunter 1939]にも明らかのように、もはや全滅に近い状態であつたことがわかる。

そしてある意味では、ことに紙漉き職人とその技術に関

史苑(第五九卷一号)

し、このような「風前の灯」を最終的に吹き消したのが、ガンディーらによる一九三〇年代以降の村落工業復興活動、ことに製紙業における「ハリジャン」労働者の大量導入であつたといえ、いいすぎであろうか。むろんそこには、苛酷な植民地政策がその厳しさを増していった当時の事情もある。しかし、ややのちの一九四〇年代の状況として、紙漉き職人についての具体的言及ではないが、伝統的な手工芸職人の技術の衰退と彼らの置かれた飢餓状態ともいえる当時の社会経済的状态に対して、グルシヨドイ・ドットはいっそう激しい危機感をもつてその改善を訴えている[ドット一九九六]。このことは、さらにのちの七〇年代半ばに筆者が行なつたインド・パキスタン・ネパールにおける紙漉き職人とその工房の徹底調査、さらにはまたニータ・プレームチャンドによる一九九〇年代の調査によつて強く印象づけられるところである(小西一九八五、Prenchand 1995など)。

ガンディーらによる村落工業復興策とKVIC

M・K・ガンディーが、スワラージ自自治独立とともに、スワデーシーすなわち経済的自立更生のための国産品の奨励をその独立闘争の重要な理念と手段としてかかげたこと

## ガンディーによる村落工業の復興(小西)

は、よく知られたところである。ことにランカシャーの綿布に対抗するため彼が率先して行なった木綿の手紡ぎとその手織り綿布、すなわちカーディー(Khadi/Khaddar)については、外国製および工場製綿布の追放とともに農村の自立を訴える、社会・政治・経済にわたる理念的象徴として多くの議論もなされ、その独特の経済思想とともに問題にされるが多かった。

しかし一方、村落手工業(Grama-udyog)の復興をうたって推進されたスワデーシーの現今の実態については、これまであまり、具体的には明らかにされてこなかったように思われる。特に日本では、インド経済の現状・実態については研究者層もきわめて厚いのに、またスワデーシー理念がスワラージと並ぶ重要な政治理念上の二本柱であるにもかかわらず、二、三の炯眼の研究者をのぞいて(深沢 一九六六、篠田 一九八一、石井 一九九四、一九九五)ほとんどこの問題が研究の大きな具体的対象とされてこなかったのは、ことに筆者のような門外者にとっては驚くべきことに写る。しかもその多くが、彼の取った経済政策の実態的研究というよりも、どちらかといえばガンディーの思想の一部として、経済思想や理念を問題とする論が主であったことも特徴的である。

いうまでもなくガンディーは、カーディーを、具体的な

運動としてのみならず、その独立運動の理念を具現するものとしても紡ぎつづけた。このことは、彼が一九二〇年代以降一貫して『ヤング・インディア』誌や『ハリジヤン』誌に書きつづけた「Gandhi 1955」<sup>1)</sup>を受け、一九二五年には、「全インド紡糸者協会」All India Spinner's Association<sup>2)</sup>が設立された。さらに彼は、一九三四年には他の村落手工業の復興を計るべく、この段階ではまだ別組織の、「全インド村落工業協会」All India Village Industries Association<sup>3)</sup>を設立した。彼にとっては、カーディーその他の村落手工業の復興は農業の復興とならぶ重要な課題であったが、その精神は一九四七年のインド独立後も受け継がれ「憲法第四三条」<sup>4)</sup>、一九五一年以降の一連の五カ年計画においても重要な課題とされて、一九五三年には旧二協会を合わせた「カーディー・村落工業委員会」KVIC<sup>5)</sup>が発足して、今日に至っている。

その活動は、現在では、木綿・絹・羊毛にわたる手紡ぎのカーディーをはじめとして、製紙・皮革・油脂・石鹼・木工・製陶・繊維・マッチ・養蜂・製糖など、およそ日常生活にかかわる諸分野にわたる生産とその普及活動を展開しているが「KVIC 1976」<sup>6)</sup>そのかかえる問題は少なくない。たとえば、その品質の低下や美的センスのまったくの欠如<sup>7)</sup>、また各生産分野における、ムスリムであれヒンドゥーであ

れ、ある意味で「カースト」に基づく伝統的な担い手に対する社会・経済的圧迫、無視と蔑視による伝統的職人層の孤立、あるいは近代化の名のもとにおけるその社会・技術的同化、等々がそれである。

このような問題の所在は、すでにグルシヨドイ・ドットも緊急の問題として一九四〇年代に指摘したことであり、今後も大きな議論の余地のあるところである。しかしドットの主たる関心は、従来伝統的職人たちが担ってきた「美」の創造力の衰退にこそ向けられていた。「このままに彼らを放置しておいた結果、いったんその伝統的天分が絶えるようなことでもあれば、その再起には、さらに数世代かのをちを待たねばならないだろう」「ドット 一九九六・一七八」という彼の危惧は、まさに現実のものとなつてゐる。彼は伝統的な工人たちの芸術的資質を勇気づけることによつてのみ、その「製品にも独自の民族的刻印が与えられ、それによつて市場価値もずつと増すであろう」「同」ともいつてゐるが、伝統美を称賛し、その保護・保存を力説する一方、ガンディーのように、彼らの置かれた社会経済的状况に対してなんらかの具体的提言をするものではなかった。彼の力説する伝統美を、買い手・使い手の側にどう具体的に活かし、現在以降の社会・文化に息づかせつつ、市場でも充分にペイするものとなすかという議論がここにはない。逆

史苑（第五九卷一号）

にまた、概して行政や経済を問題とする研究者や評論家には、「美」に関する関心がまったくないのである。

ともかく、ガンディーらがめざした村落工業の復興とは、新生独立インドの礎としての村落経済ないしは村落社会総体の国レベルでの復興であつて、必ずしも地域・村落に伝わる歴史的・伝統的技術の復興ないしは伝統的職人たちの救済ではなかつた。まして「消えゆく美」を惜しむような「趣味人的」活動とはまったく無縁のものであつたことは確認しておかねばならない。すなわち村落にありあまる人口、それも職がなく、手に技術もない人びと、ことにガンディーにとつては「大きな社会・経済的借りを返すべき」神の子たるハリジャンの救済と援助こそが、彼の最大の関心事であつた。そこでガンディーらは、村の身近な暮らしに得られる材料と技術とをもつて、自らの身のまわりの製品をつくりだすために、これらの人手を多量に投入し、スワデーシーすなわち「国」レベルにおける経済上の自立更生、ひいてはブルナ・スワラージに完全独立をめざしたのである。それは外国製品のみならず、およそ工場でつくられた生産品自体にも対抗しようとするものであり、その反近代的思想と行動は、一種の厳しい文明批判でもあつた「長崎一九九六」。しかし、このあまりにも「近代」に敵対する立場の固執は詩人タゴールなどからも大きな批判が寄せられ



たところでもあり、この点に関してはさらに慎重な議論が必要とされよう。またガンディー自身が『民族ブルジョアジーの代表』であったとするナンブーディリッパードウのやや極端な議論「ナンブーディリッパードウ 一九八五」すらあるが、ともかくこの場合、「近代」すなわち機械に對抗すべきガンディーにとつての最大の武器ないしは作戦は、ともかくもありあまる労働人口を人海戦術式に投入することであった。しかし彼らは必ずしも手に職（特殊技術）をもたぬ人びとであったから、その技術はいたつて簡便なものではなければならず、コストを下げるためにも、原料はできるかぎり廉価のものでなければならなかった。身のまわりの原料を身近な技術でリサイクルするというこの理念は、信じられぬような労賃の安さ（これもコストを下げるための方便である）を別にすれば、Small is beautifulで知られるシューマツハーのいう「適正技術」の理念「シューマツハー一九七六」を四〇年も早く先取りするものとしても、きわめて注目すべきものであった<sup>1)</sup>。

## KVICと抄紙技術の変容

この点に関し、再び手漉き紙の問題に立ち返って、具体的にその問題点の所在を明らかにしたい。すなわちガンディー

らによるKVICの方式によれば「Toshi 1947; Narayan-swami 1958」、その原料としては多くの場合、従来のポロ布ではなく、最も安くかつ叩解も簡単な故紙や紙の断ち屑が用いられるようになった。その質をあげるために木綿布を用いるならば、時間も手間もかかる、すなわちコスト高によつて到底機械漉きには対抗しえない従来工法によらざるを得ず、そうでない限り、やはり叩解の行程には叩解機のビーターを導入するよりなかったからである。しかもさらに他の繊維質の物質、ことに固い繊維に富むものをそこに混入しようとするならばそれは避けられないことであり、ガンディー自身が、あるいはB・クマールラッパやK・V・ジョーシーらの弟子たちの提言によつて、やがては機械の導入を認めざるを得なくなっている。すなわち叩解は、やがてかつての「水漬け法」(cold-retting) すなわち発酵による紙料の分解と砧による叩解、そして丹念な水晒しを何回も繰り返かえず手間と時間のかかる方式にとつてかわつて、成分の強いソーダ・石灰・漂白剤を多量に混入して高温で煮沸し(cooking method) さらにシキサーのような刃を備えたホーランダービーターによつて一気に叩解する方式へと移行したのである【図2】。

また最も年季と勤、コツの要る抄紙の方法は、漉き槽<sup>な</sup>から瞬時に汲み上げる方式ではなく、計量カップなどで一定

量の紙料を漉き簀もしくは金網<sup>1)</sup>の上に注ぎこみ、足踏み式のレバーなどによって自動的に漉き簀を水平にもちあげることによって水を切る、すなわち誰にでもできる方式へと改められた〔図3〕。

この場合、伝統的にもインドの抄紙法は、日本のような流し漉きではなく溜め漉きであったことが関係しているといえるが、あらかじめ漉き槽に紙料を容れて漉きあげるのではなく、漉き槽には水を張るだけで上から一定量の紙料を注ぎこむ方式は、むしろネパールなどに伝統的な技術であり、その技術的系譜関係は不明である。また、ネパール式ではこのまま紙を漉き簀に付着させた形で乾燥させるが、インドでは、新方式においても湿紙はあいだに木綿布を挟んだ上で（日本のようにトロアオイのような粘材の「ネリ」を用いない）紙床に重ねられる点は、かえって「伝統的」といえよう。技術移動と文化変容の問題として、今後の大きな重要課題であるが、この点にはいまは立ち回らない。

また、叩解と並んで最も手間ひまがかかるのが磨研の工程である。従来は一枚一枚紙を大きな鞍状の木床に据え、丹念に玉石でもって縦横に磨きあげる方式であったが、この時間と手間のかかる方式に変えて、磨研の工程は、一気に艶出しを行なうカレンダーリング・マシンにまかせること

となった〔図4〕。すなわち、この工程の如何によってこそ紙の質の良し悪しが決まる叩解と磨研の二工程は、いずれも機械化によって省力化が計られたのである。さらにのち、従来はただゴミとして捨てられていた稲藁や粃、サトウキビの絞り粕、バナナの皮や葉茎などの、セルロースには富んでいるが叩解が困難なものをも原料として用いるようになってからは、生態学的見地（これもガンディーの理念と関わる）からすれば立派なことであるが、結果として、ビーターもカレンダーリング・マシンも、身近な技術どころか、いたって複雑なものへと変わっていったのは、むしろ彼の当初の理念からすれば皮肉な逸脱にすら見える。

ともかくインドの手漉き紙は、抄紙(*hand-lifting*)の部分のみはまさに文字通り「手漉き」ではあるが、必ずしも *hand-made* ではなくなってしまうている。原料に故紙を用い、多量の化学薬品を使って叩解も磨研も機械に頼ってしまっている「手漉き紙」に、かつての質は求められない。しかも職人のほとんどがハリジャンであり、かつての製紙センターに辛うじていまも細々と紙を漉いているムスリムたちも、KVICの指導もあって、その原料や工程に概ねこの新方式を採用している。日本のミツマタと同様、ジンチョウゲ科の樹皮を素材とするネパールにおいてすら、ビーターや足踏み方式の抄紙法、あるいはカレンダーリング・マ

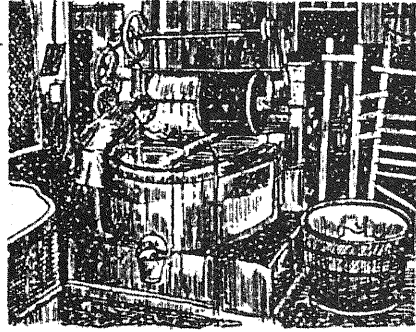
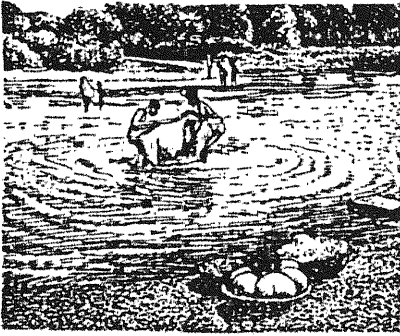


図2. 水漬け法による水晒し(左)と、洗浄・叩解を行なうホーランダー・ピーター  
(KVIC資料1976による)

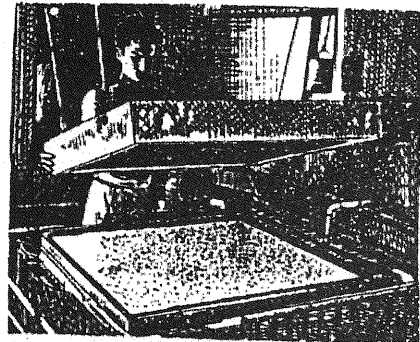


図3. 従来の抄紙法(左)と、足踏み式の“改良法”(同上)

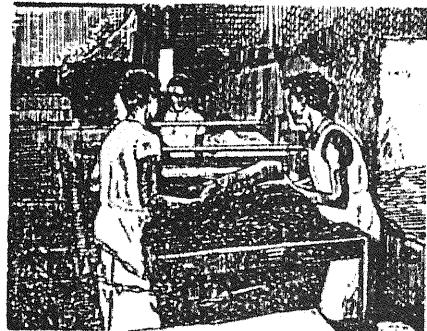


図4. 玉石を用いた従来の磨研(左)と、カレンダーリング・マシンによる艶出し(同上)

カンテールによる村落工業の復興(小西)

シンを導入しつつある現状に驚かされる。ともかく、かくて彼らの伝統的抄紙技術はかえって「村落工業復興」策によつて終焉し、その社会的地位は、非ムスリム・非熟練工によつて奪われてしまった。

偉人にありがちな「矛盾の人」ではあれガンディーは、ドットあるいはタゴールのいうように、この点において批判されるべきなのであるか。たしかに国造りを急務とするガンディーにとつて、彼ら知識人・評論家たちの批判は、次元をまったく異にするものであったことだろう。「生活に必要最小限のものを所有することは窃盗にも等しい」とまでいったガンディーにとつて、美の追求などといった悠長な議論は、ほとんど眼中になかったといつてよい。しかし、生活に必要な最小限のものうちに、最小限の美はまったくその位置を得られない、かつ得られるべきでないものなのであるか。

たしかにガンディーにとつては、極限に近い簡素な生活の内にこそ「美」を見えるという彼なりの語られぬ「美観・美学」があつたと見ることもできるであろう。しかし、例えばよくいわれる「真・善・美」のうち、彼の厳しい禁欲のブラフマチャリ（梵行）生活において、良くも悪くも、「美」はもつとも軽視された側面ではなかつたかと筆者には思えてならない。彼は簡素な生活のうちにも（うちにこそ）

史苑（第五九卷一号）

ある最小限の美が、胃袋に最小限の食物と同様、心にとつても必需のものであつたことすら、言及することがなかつたのではないかと思われる。少なくともこのレベルにおける「美」が、いわゆる「趣味的」なものとはほど遠いものであることはいうまでもない。そしてかういうとき、こと「豊かな」国の出身である筆者は、ともすれば多少の後ろめたさのようなものを感じてしまふのである。

一九七七―七八年にわたる調査時、いまなお職人気質を失つていないが、辺鄙な村で吸取紙のような故紙再生紙を漉いているムスリムの老人にようやくして出会い、彼とかつての美しい紙について語りあつていたとき、彼はわざわざ遠くの日本から訪ねてきた筆者の手を握つて涙をこぼしながらも、こういつた。「われわれは、金持ちや好事家の趣味にあわせて紙を漉いてるのではないのです。しかも故紙再生の「手漉き」のザラ紙は、見栄えもよい工場での機械漉き紙に、コストの上でも、いまだ太刀打ちできないままにある。そしてこのことが、筆者の前稿「小西一九八五」の結語であつた。

そしてこのときの調査以来、二〇年あまりがたつた。実は昨年、近年とみに国力をつけたインドにおいても、たとえ高価であつても、あえて良質の手漉き紙を求める「好事家の趣味人」が出てきていることもまた、事実である。

本来インドには、美に対しては金に糸目をつけない階層も古来あったことを忘れてはならない。事実現今のムンバイ（ボンベイ）などでは、古来の技術を保持しているムスリム紙漉き職人を指導しつつ、あえて伝統的な良質の手漉き紙を特注して、ことに輸出などにむけて、それを用いたレターセットなどをつくりはじめた商會も出現しだしている。

たしかに日本でも、重要無形文化財の指定を受けた因州や黒谷などの和紙が一枚数千円もすることに矛盾を感じなくもない。しかしこの問題は、ことに開発を急務とする国にとつて、伝統と開発、あるいは地域と国家、辺境と中心をめぐる大きな議論の一環としてとらえられよう。ガンディーのソフトウェア理念とその具体的な実現であるKVIC活動の実態に関しては、いまだ詳しい事実関係を明らかにすべく今後の課題とせざるをえないが、現段階でのひとつの問題提起として受け止められるならば幸いである。

### 付記 —— ガンディーの評価をめぐる

筆者による以上の発表は、前述のシンボジウムが「ガンディー再考」であったにもかかわらず、ガンディーの「意外な」一面を紹介するものとして、あるいはガンディーに対する「片寄った」見解として、多少の反響を呼んだよう

である。ことに古代史や哲学分野のかたがたからはある種の共感や理解の発言があったのに対し、概してガンディーを積極的に評価してきた近現代史のかたがたのうちには、反発を感じられたむきもあつたらしい。たしかに筆者の紹介した事例は特殊なものであろうし、これをもってガンディーの思想と生活を全面的に否定しようとするものでないことはいうまでもない。

ただしそれでも、ある参加者のかたから事後に寄せられたコメントは、ガンディーをいまなおどう評価するかについて大変貴重なものであるので、その趣旨をここに紹介しておくことを許されたい。<sup>5)</sup>それによると ——

「KVICの紙が、品質や美的センス、さらにはコストの点でも工場製の紙に太刀打ちできないということは、ひとり抄紙にかぎらず、カーディーその他の製品についてもいえることではないかと思われるし、またそれは現在にはじまったことではなく、ガンディーが生きていた時代から、彼自身が直面していた問題だったのではないかと思う。経済的効率性や資源配分の効率性の観点からは、ガンディーのチャルカ運動、ひいては今日のKVICの活動などが、まさに非効率的な側面をもっているようにみえることは、たとえば篠田隆氏の研究「一九八一、小西注」などが示しているところである」。

「しかしながら、経済的には一見非効率なこれらの運動も、逆に競争を通じて効率性を限り無く追求しようとする社会のシステムに対して、それが決して万能でないことを示していたのではないか。工場製製品との競争で見劣りする状況にありながらも、失業者の救済と貧困層の底上げを、経済的効率性よりもあえて優先したところにスワデーシー運動の特徴の一つがあったのだと思う。ガンデー自身は、経済的競争の中に一種の「暴力」のようなものを見いだし、競争とは違った原理で動く社会の建設をめざしていたのではないかという印象を受けている。」

氏の以上のごまことに的確なコメントに対し、筆者はまったく異存がないどころか、まさにその通りであると思う。ただ、筆者はKVICの経済的効率や非効率性自体を問題にしているのではなく、それが文明批評ないしは国造りという大義に関わるものであったにしても、その真にして善なる大義が一部のマイノリティーに結果として皺寄せされる、「暴力的」事実があることをこそ指摘しようとしたのである。したがって、氏のさらなるコメント、「経済発展や環境問題、ひいては平和の問題などを考慮するときに、人類の暴走に対する歯止めの思想として、ガンデー思想の重要性を思わずにはいられない」という点、すなわち思想家ガンデーの思想評価についても、ことに、とうとうイン

ドでも核実験が行なわれてしまった一九九八年の現在、まさに原則論として、なんら異論のあるところではないどころか、ますます真摯なガンデー「再考」がわれわれにせまられていることを明記しておく。

なお本小論は、私が立教大学に赴任後まもなく書いた『史苑』の拙稿(四四—一〇号、一九八五年)の続編であるといつてよい。同稿はムガル朝期における問題を整理しようとしたものであったにもかかわらず、同稿の最終部分はやや唐突に、M・K・ガンデーによる新技術導入の問題に、時代上も飛躍してしまった。しかし、論文としてのこの弱点について、唯一「面白い」とのご高評を下されたのが、先輩の森弘之氏であった。

同氏とは氏が東大東洋史の助手であった時代から親交があり、その後やや疎遠の時期もあったが、立教大学史学科で一緒にやってからは、常に氏の学問的厳しさと人間的やさしさに鼓舞され、またいかにも江戸っ子らしい洒落なユーモアにも元気づけられてきた。その氏からの先のコメントがきっかけともなつて、いまだになお今後の課題を示唆したにすぎないこの小論につながっていることを思うと、氏の急逝が本当に残念でならない。筆者の今後の仕事にもご生前のように厳しい眼を向けてくださることを願いつつ、こころより森先生のご冥福を、あらためて祈るものである。

注

(1) 第一〇回日本南アジア学会大会でのシンポジウム「ガンディー再考」において、またその後によくのかたがたからいただいた貴重なコメントに対し、筆者は深甚の謝意を表したい。その趣旨の一部は本稿に活かすべく努めたつもりであるが、なお今後も多くのご教示を得たい。

(2) 一九九四年に、筆者はかつての工房址を訪ねようとしてスィヤールコート刑務所内の見学を申し入れたことがあるが、同所の性格上、入構許可を得られなかったのは残念である。ただし、その時の聞き取りによると、構内にはまだ当時の擦り鉢状の叩解器が、土中になかば埋もれて残っているという。そのことからすれば、当時の製紙原料が、細かく裁断した故紙であり、それを杵状のもので搗くか、いまもベンガル地方のモイナンでやっているように、足で採みほぐすようにして踏んだであろうことが容易に想定できる。

(3) ニューデリーのコノートプレスに並ぶKVVICのカーディー・パワンと、全インド手工芸振興委員会 All India Handicrafts Boardの経営するコテージ・インダストリー・エンポリアムの販売品を見比べてほしい。後者の品があまりにも観光客向けのお土産品で、しかも高価であるのには問題もあるが、前者では、ガンディーとその思想・運動への思い入れなしには必ずしも購買意欲をそそられないのは、やはり問題であるといえないだろうか。

(4) 「先進諸国におけるAlternative Technology (新しい技術)」、「途上国におけるAppropriate Technology (適正技術)」、いずれにせよATIと略称されるこの概念は、一九六〇年代末に模索された「人民のための科学」に起源し、

ことに七〇年代に入ってシューマッハーが打ち出した「中間技術」intermediate technology の概念により、巨大な設備投資を要し、生態系にも破壊的な現代科学技術に対して「もう一つの」技術を提唱したことから、さらに積極的に展開する。その理念は、地域の自然・文化・社会環境への適合、少ない資本投資、非専門家にも操作できる簡便さ、当該地域の原料を用いてその地域で消費されること、などによって人間の回復をはかろうとするものであり、ガンディーの思想にも通ずるものをもっている。「シューマッハー 一九七六、里深 一九八〇」などを参照。

(5) なお、このコメントを（匿名ではあれ）ここに紹介することには、コメントを下された方の承諾を得ていない。しかしなおこのような一種の背信行為をするのは、このありがたいコメントが、氏のみならず、ガンディーに対するある種の共通した、しかも決して間違っているとはいえないイメージを代表するものとして、あえて紹介させていただきたかったからである。この点をご理解いただきたく願うとともに、ここに同氏に深くお詫びするものである。

【引用文献】

- Gandhi, M. K. [Bharatan Kumarappa ed.] 1955 *Khadai: Why and How*. Ahmadabad: Navjivan Publishing House.  
 Hunter, Dard 1939 *Paper-making by Hand in India*. New York: Pyson Printers.  
 Joshi, K. B. 1947 *Paper Making as a Cottage Industry*. Wardha: All India Village Industries Association.

- Khadi Village Industries Commission 1976 *Khadi and Village Industries: a review*, Bombay : KVIC.
- Konishi, M. A. 1984 'Early Stages of Paper-making in India and Nepal', *Journal of Intercultural Studies*, 10 (for 1983) : 59-66. Kyoto : Kansai Univ. of Foreign Studies.
- Konishi, M. A. 1990 'Multāni Khāghaz : Lesser Known Aspect of Multan as a Paper-Making Centre', *Lahore Museum Bulletin* 2 (for 1989) : 61-68. Lahore : Lahore Museum.
- Liotard, L. 1833 *Note Regarding Paper-Making Industry in India*, Simla : Government Press.
- Narayanswami, C. K. [ed.] 1958 *The Story of Hand-Made Paper Industry*, Bombay : Khadi and Village Industries Commission.
- Premchand, Neeta 1995 *Off the Deckel Edge*, Bombay : The Ankur Project.
- Watt, George 1892 "Paper and Paper Fibres", in his *Dictionary of Economic Products*, VI-1, London & Calcutta.
- Watt, George 1908 *The Commercial Products of India*, London : John Murray.
- 石井一也 一九九四 「マハトマ・ガンディーの社会経済思想—受託者制度理論を中心として」『経済論叢』一五四—一七二—  
九一、京都大学経済学会。
- 石井一也 一九九五 「マハトマ・ガンディーの社会経済思想—オルターナティブ開発思想の一流流」、本山美彦編『開発論のフロンティア』所収。同文館。

史苑 (第五九卷一号)

- グルシヨブ・ドット [小西正捷訳] 一九九六 『ベンガル民俗芸術論』穂高書店(Gurusaday Dutt, *Folk Arts and Crafts of Bengal: the Collected Papers*, Calcutta : Seagull Books, 1990).
- 小西正捷 一九八五 「インド伝統的製紙業の興亡—ムガル朝の確立より一九世紀末まで」『史苑』四四—一—一五〇、立教大学史学会。
- 小西正捷 一九九六 「インド中・近世における抄紙技術の導入と確立」『歴史と地理』四九二—一—二。山川出版社。
- 里深文彦 一九八〇 『等身大の科学』。日本ブリタニカ。
- 篠田 隆 一九八一 「ガンディーとチャルカー運動」、『富岡倍雄・梶村秀樹編『発展途上経済の研究』所収。世界書院。
- シュンペッター, E. F. [斉藤志郎訳] 一九七六 『人間復興の経済』。祐学社 (E. F. Schumacher, *Small is Beautiful: a Study of Economics as if People Mattered*, London : Vintage, 1973).
- ナンブーディリッパードウ, E. M. S. 「大形孝平訳」一九八五 『ベンターとガンディー主義』。研文出版 (E. M. S. Nambudiripadu, *The Mahatma and the Ism*, Rev. ed., Calcutta : People's Publishing House, 1981).
- 長崎暢子 一九九六 『ガンディー 反近代の実験』。岩波書店。
- 深沢 宏 一九六六 「モハンダース・カラムチャンド・ガンディー—とくにその経済思想について」、『一橋論叢』五五—四・五八—九六—一〇。一橋大学。
- (立教大学教授)



M. K. Gandhi and KVIC

— Socio-economic Changes in the Hand-made Paper Industry  
< Summary for the Indian Corroborators  
and Supporters of the Research >

by M. A. Konishi

ガン  
デー  
ーに  
よる  
村落  
工業  
の復  
興(小  
西)

Hand-made paper technology in India was essentially based on the Muslim tradition, and *kāghzī* or the paper-makers were essentially Muslims. Besides that social aspect, the technology using old rag and animal glue seemed to be impure to the orthodox Hindus. It could have been relevant to Gandhi-ji's introduction of *Harijans* to the new industry of semi-mechanized paper-making and leather productions in later days. However, already by the beginning of this century, traditional paper-making industry by the Muslims was in utter decline due to the import of mill-made paper from the suzrain, and even the locally made "jail-papers" made by hands of unskilled workers using old paper as the material, easy for preparing the pulp.

When Dard Hunter visited various paper-making centres in India in 1930s, the situation was already tragic, and by 1970s when I visited the same sites, I could hardly find any authentic Muslim traditions which once produced beautiful and durable hand-made paper, being almost totally replaced by the KVIC (Khadi Village Industries Commission) method started by Gandhi-ji in the late 1930s. He introduced *Harijans* in the industry then and freely used the old paper and adopted the easy methods so that any unskilled workers can be involved. The most difficult portions of the traditional technology were the beating of rag, lifting according to the long experience, and the laborious calendering; but the new method adopted either the materials easy to be beaten, and/or the mechanical cooking method using the Hollander beater. Lifting apparatus fit to the unskilled workers and calendering machine were also freely introduced.

These changes in technology literally shuttered the future of the Muslims to produce hand-made paper according to their traditional methods. All these changes are the results of Gandhi-ji's *swadeshi* principle, and we may have to re-examine this whole process and recall the contemporary criticisms raised by Rabindranath Tagore and Gurusaday Dutt in 1940s.